碧雲荘 みどころポイント

ポイント1 碧雲荘とは

小説家・太宰治が居住・滞在した建物です

旧所在地：東京都杉並区天沼
建築時期：昭和10年
建物概要：木造２階建、和洋折衷様式の住居兼下宿（２階の５部屋が下宿だった）
建物特徴：玄関が２つあり、玄関脇に八角形の飾り窓とステンドグラスがある。天井は高く、奥の和室の欄間や明かりとり小窓などの細工を施し、階段や廊下は広く、ゆったり作られている。２階の５部屋の全てに銘木を使った床の間があり、奥の８畳間に太宰夫婦が住んでいた。

碧雲荘、湯布院移築までの経緯

2005年頃までは学生などの下宿でしたが、杉並区が周辺の土地と一体で福祉施設などを整備するため所有者から土地を取得。「文学的な価値がある建物を残してほしい」と地元の住民団体から保存と活用を求める声がありましたが、解体を余儀なくされます。

取り壊される予定だった碧雲荘ですが、古民家を移築し、旅館に活用していた橋本律子が所有者と面談。所有者の生家でもある碧雲荘への思いを聞き、保存のために移築を決意し、この土地によみがえりました。湯布院に太宰が逗留した記録はありません。文人墨客が訪れた湯布院、温泉が好きだった太宰は喜んでくれたのではないでしょうか。

ポイント2 太宰治と碧雲荘

太宰治は1936年11月（当時 27 歳）から約７カ月間、２階の８畳間で暮らしていました。代表作「人間失格」の原型とされる小説「HUMAN LOST」を執筆。その後書かれた「富嶽百景」には、愛する人の裏切りを知り、共同便所の窓から小さく見える富士山を眺めてじめじめと泣いた。その苦しい心情を回顧する中で、あの一節を綴っています。

「あかつき、小用に立って、アパートの便所の金網（かなあみ）張られた四角い窓から、富士が見えた。小さく、まっ白で、左のほうにちょっと傾いて、あの富士を忘れない」

◉HUMAN LOST は「二十世紀旗手」に収録
◉富嶽百景は「走れメロス」に収録　　※どちらも購入できます

ポイント3 時を経ても色褪せることのない物語を生み出した太宰治

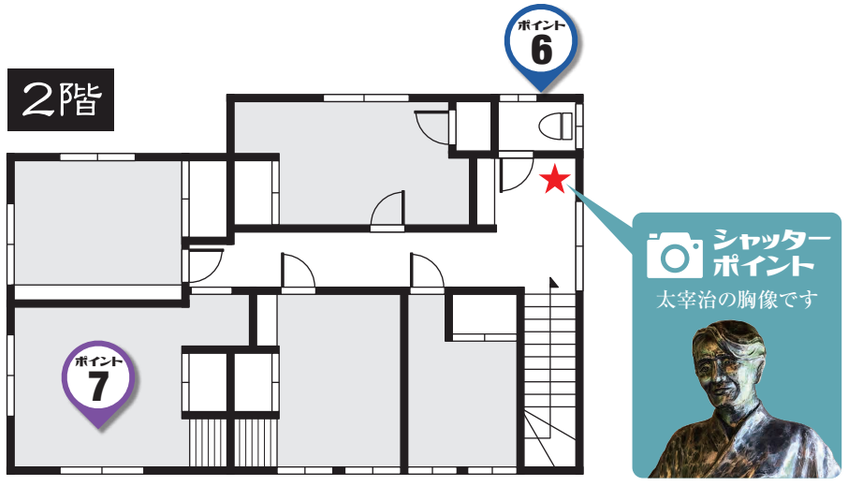
太宰治は39歳で玉川上水に入水し、若くして他界しているので作家活動期間は決して長くはない。太宰作品は、前期、中期、後期に分けられるというのが通説です。

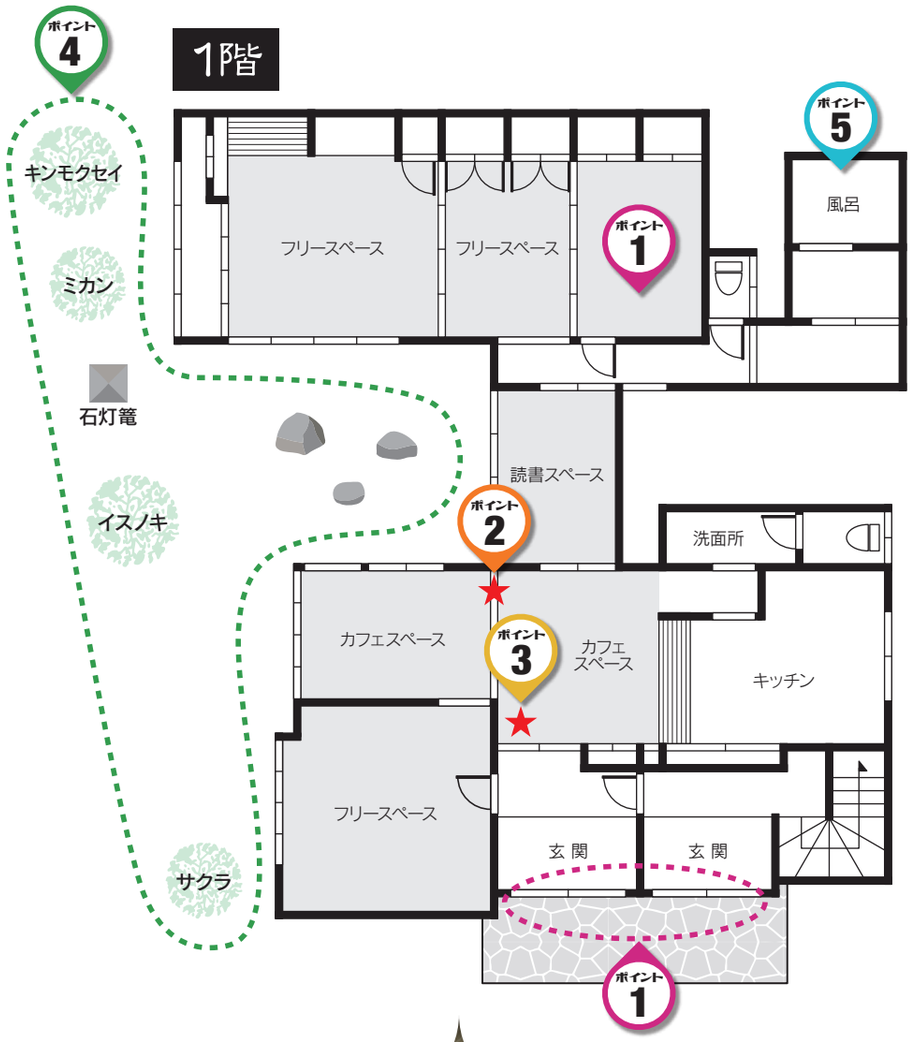
「走れメロス」に代表される明るい文体のものは中期に多く、そこに至るまでの前期は暗い。入社試験失敗、大学中退、実家からの勘当、芥川賞落選など幾多の挫折を味わい自虐的な作風で精神的にも不安定な時期であったようです。

その前期の大部分を太宰は東京の杉並で住居を転々としながら過ごしています。太宰にとっての杉並での生活は、太宰文学の出発地とも言えます。一時期、杉並を離れ船橋で活動し、世間に注目をされ始めますが、麻薬中毒の疑いや精神病棟への入院など失意の連続を繰り返した後、また杉並に戻って再出発を図ります。

そこで長い寡黙な時期を過ごした後に「満願」を執筆し、明るい平易な文体を特徴とする中期の作品群に昇華しました。その後、甲府、三鷹と移り住み、数多くの名作が書かれますが、その重要な転換点を過ごしたのが、この碧雲荘だと言われています。

◉太宰作品の貴重な初版本を展示しています





ポイント4 太宰治と又吉直樹

2015年に発表した初の中編小説「火花」で芥川賞を受賞、作家としても知られているピースの又吉直樹（お笑い芸人）は、太宰好きで有名。碧雲荘の保存活動に尽力され、第２回太宰サミットで公演しました。その又吉さんが碧雲荘の玄関の前にあった石灯篭（灯籠）や庭の桜の木など数本を自腹を切って、持ってきてくれました。

ポイント5 太宰治と温泉

孤独な内面を描き多くの若者の心を捉えた太宰治も、無類の温泉好きだったようです。文豪と温泉の熱い関係…そこには、ハダカの文豪の姿があり、好きな場所だからこそ名作が誕生した。非日常の癒し、そして創作の場を求めて温泉地を訪れた文豪。その足跡を辿ると、彼らの知られざる姿が見えてきます。
※この風呂場だけ増築しました。他は全て再現し、間取りもそのままです。

ポイント6 太宰治の居住・滞在歴

太宰治が居住・滞在した場所は 75 箇所あり、生家である青森の金木町の「斜陽館」や山梨の「天下茶屋」など有名ですが、現在も残存する建築物（2016年２月現在）は10軒だけです。

三鷹時代の住居なども全て取り壊されてしまっていますから、この碧雲荘の貴重さは特筆すべきものがあります。「富嶽百景」でアパートの便所の窓から見えた富士が忘れられないと書かれていますが、その便所がこの建物の２階に今も現存しています。

ポイント7 笑われて、笑われて、つよくなる（HUMAN LOST）

パビナール中毒のために入院した太宰自身の実体験をもととして書かれた小説「HUMAN LOST」は、この部屋で書かれたものです。入院とその間に愛する人の裏切りを知り、生涯最も辛く過酷な実生活を送りました。小説でもスランプの時代だったようですが、この時代があったからこそ、その後の太宰治があったと言われています。